

働き方改革に関する総理と現場との意見交換会（第1回）
議事録

（開催要領）

1. 開催日時：平成28年10月13日（木）17:50～18:50
2. 場 所：官邸4階大会議室
3. 出席者：

安倍晋三	内閣総理大臣
加藤勝信	働き方改革担当大臣
塩崎恭久	厚生労働大臣
真野一則	アイリスオーヤマ（転職・中途採用）
雨堤正信	アイリスオーヤマ（転職・中途採用）
佐藤志保	藤精機（転職・中途採用）
島田浩孝	GMタイセー（転職・中途採用）
濱田直子	東京ガス都市開発（学び直しによる再就職）
高木みどり	IT会社勤務（学び直しによる再就職）
築取 萌	グローバルヘルスコンサルティング・ジャパン（学び直しによる再就職）
墨田康男	ロート製薬（副業・兼業）
二瓶真衣	ロート製薬（副業・兼業）
中村龍太	サイボウズ、ダンクソフト、NK アグリ、スノーピークビジネスソリューションズ（副業・兼業）
横澤昌典	向洋電機土木（テレワーク）
広沢暁子	損害保険ジャパン日本興亜（テレワーク）

（議事次第）

1. 開会
2. 内閣総理大臣挨拶
3. 参加者からの発言と意見交換
4. 閉会

（概要）

○加藤働き方改革担当大臣 それでは、ただいまから働き方改革に関する総理と現場の皆様方との意見交換会をさせていただきたいと思っております。今日は皆様、それぞれお忙しい中、足を運んでいただきましてありがとうございます。

私は働き方改革担当大臣をしております加藤でございます。今日は司会をさせていただきます。

今日は転職・中途採用、再就職、副業・兼業、テレワークという4つのテーマについて、それぞれ経験をされている皆様方から御意見をいただきたいとい

うことで、12人の皆様方にお集まりをいただきました。

また、政府側からは塩崎厚生労働大臣にも御出席をいただいております。

冒頭、安倍総理からまず、御挨拶をいただきたいと思います。

○安倍内閣総理大臣 皆さん、こんばんは。

今日は大変それぞれお忙しい中、こうした機会を作っていただいたことに、御礼を申し上げたいと思います。

私たちが進めている一億総活躍社会の実現の鍵は、働き方改革だろうと、そのように思っております。

まず先般、電通の社員の方の過労死では、働き過ぎによって、貴い命を落とされたわけがございます。こうしたことは二度と起こってはならない、このように思っているわけでありますが、働く人の立場に立った働き方改革をしっかりと進めていきたいと、こう思います。

多様な働き方の中において自分の未来を創っていくことができる社会を創っていきたい。そのための働き方改革、働き過ぎを是正する上において、しっかりと制度改革も進めていきたい。多様な働き方も可能にしていく。そのために必要な法案を国会に提出していく考えでございます。そのために、働き方改革実現会議を作ったわけございまして、今日は実際様々な働き方をされている皆様に、実際に経験に沿ったお話をいただきまして、そして皆様方の実際に経験しているお話を受けた上で、地に足の着いた議論を進めながら、働き方改革を実現させていきたいと思っております。

今日は忌憚のない御意見を賜りますように、よろしくお願い申し上げます。

○加藤働き方改革担当大臣 よろしく願いをいたします。

それでは、恐縮ですが、それぞれ皆様方には2分半程度でお話をいただきたいと思っております。

まず、転職、中途採用につきまして4名の方からお話をいただきますが、最初に真野様からお願いいたします。

○真野氏 アイリスオーヤマの真野でございます。よろしく申し上げます。アイリスオーヤマで製品デザインを担当しております。

前職はパナソニックで、同じく製品デザインを35年間担当しておりました。

辞めるきっかけは、役職が上になるとどうしても管理監督業務が増えてまいりまして、手を動かすデザインそのものができなくなってくる。そこに希望退職制度というものがあまして、それに乗っかって58歳のときに転職を決めました。そして手を動かすデザイナーになろうと思ったのがきっかけでございます。

その後、転職活動なのですが、実はこれは楽しくやらせていただきました。パナソニックという会社が退職者に対するフォローがしっかりできておりまし

て、退職後の社会保障のシミュレーションであるとか、リクルートのための訓練といったものを用意してくれましたので、楽しく、自分を売り込むプロジェクトだという、これも一種の仕事だという気持ちで楽しくやらせていただきましたので、苦勞はしておりません。

アイリスオーヤマに入社してからのやりがいですがけれども、現在製品デザインを担当しております、それが最も楽しくやりがいのあることになっております。

アイリスオーヤマはもともとデザイン組織のないところだったのですけれども、私が入ったことで、おまえデザインのチームを立ち上げろということで、デザインを立ち上げることができました。

アイリスオーヤマというのはユーザー視点で物をつくる会社でございまして、デザインというのは基本はユーザー視点で物をつくるということなので、それが会社の方針と、私の仕事の仕方がうまいこと合しまして、大阪の家電の拠点も、おまえが見ろという話になりました。

ですが、マネジメントもやりながら、プレイングマネージャーというスタイルですので、デザインを進めながら管理監督職もやっているということなので、非常に今はやりがいのあることになっております。

キャリアの人たちを採用する側に今なっているわけですがけれども、そのときにどういうことに注意するかというと、おかげさまでアイリスでも家電が伸びております。ですから、喉から手が出るほど採用したいのですがけれども、今までこういうことをしてきたという経験だけを淡々と述べるのではなくて、自分のスキルはこうだから、このような仕事をしてみたいというふうに、自分のスキルを持って、ものを変えてきた人は目がきらきらしているのです。そういう人たちを見るのを、一つの自分の採用側としての視点にしております。

以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、続いて雨堤様、お願いいたします。

○雨堤氏 アイリスオーヤマの雨堤です。真野と同じく、大阪のほうのR&Dセンターに勤めています。

前職はシャープで、33年冷蔵庫とエアコンの開発をやって、それからアイリスのほうに転職しました。

私はシャープを辞めてから半年ほど就職活動をやっていました。その中で感じたことは、やはり50代後半の就職は非常に厳しいなと自分の身をもって感じました。

いろいろなところで試験を受けるなり面接をやらせてもらえるのですがけれども、なかなか最後の最後で突破できないという形で、理由を聞きますと、やは

り、もう少し若ければ何とかなっただなという話が多いのです。

企業のほうからしても、やはり60までと考えているようなところがあるのではと思うのです。60まであと何年あるかというところが、3年なり4年を切ると、そのようなりスクで採用できないという感触を受けました。

一方、私は今60ですけれども、30～40代の周りの社員と同じように仕事をしています。何ら抵抗はないです。60という意識がまず、ありません。仕事をするに関して、それが30であろうが40であろうが50であろうが、私は何も関係ないと思っています。

50代で同じように再就職したいと考えておられる方はおるのですけれども、そういった方々に何とか自信を持って、次の職場で同じように若い人と一緒に仕事をしていってもらえるような環境ができればいいのではないかと、常々考えています。

以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

続いて佐藤さん、お願いいたします。

○佐藤氏 山梨県の藤精機という、金属の総合加工を行っておる会社から参りました。

私は職業訓練を受けての就職だったのですが、訓練前はYahooとか楽天などのジュエリーショップでの店長をしておりました。ページ構築だったり顧客対応が主な仕事だったのですが、けじめのない休憩時間だったり、昼夜問わない業務、また、ほぼ不可能な有休取得などで、家事、育児がおろそかになってしまったということで、子供とまともに向き合えていないという現実突き当たりまして、再就職を決意いたしました。

離職をして求職活動に入ったのですが、ここでハローワークにてポリテクセンターの体験講習と訓練コース説明会の存在を知ります。迷わず両方に参加しまして、その中で以前より興味があった金属加工科での溶接体験に感動いたしました。びびってきたのが入所のきっかけでした。

金属加工科では、訓練を受ける中で必ず作業に必要な3種類の資格が取得できます。また、ほかに任意で3種類の溶接の資格を取得することができるのですが、その資格を取るための実技訓練と座学習の積み重ね、そして、実際に取得することができた溶接資格の全てが自分の自信へとつながり、就職活動に役立ったのだと感じております。そして、一発で今の会社に合格しております。

私は今、主にクリーンエネルギー関係や医療部品などの寸法精度の厳しい精密溶接を行っております。金属加工科では製図の作製、プログラム、板取り、曲げ、溶接といった、製品をつくるに当たって必要な工程を一通り学べますので、就職後すぐから図面も容易に読みとることができましたし、作業自体はも

ちろん図面を見ながらの製品検査などにも大いに役に立っています。

特に溶接については時間をかけて学習しますので、現場で実際に作業に入る際にも、臆することなく製品に向き合うことができました。

実際の職場環境も良好で、女性だからと云々の差別を受けることもなく仕事できております。有休なども取りやすい環境にあり、職場の雰囲気もとてもよいです。

女性目線での提案などにも耳を傾けていただいているので、社内の美化や整理整頓のルール決めなども行うことができます。作業場全体の環境も非常によくなりました。

作業自体も女性に適した丁寧さや繊細さを求めるものが、溶接には意外と多くありまして、その仕事には好評をいただいております。

最後に、これからの目標なのですが、やはり男社会と言われている物づくりの中で、男女の壁を超えた、働く女性のよい見本となれるように努力して、今まで以上に知識や技術を身につけ、ゆくゆくは自分のチームをまとめ上げられるぐらいのリーダーになりたいと思っております。

以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、島田さん、お願いいたします。

○島田氏 埼玉から来ました島田といいます。現在、株式会社GMタイセイに勤めております。

自分は約30年間、電機メーカーの工場では液晶テレビ、液晶パネルの製造に従事していました。工場では今回、事業縮小ということで他県の転勤を余儀なくされまして、正直なところ、まさか自分の会社がこのような状態になるということは思ってもいませんでした。

しかしながら、自分の状態を確認しまして、これから何ができるかということ考えたところ、家族の構成を考えながら、転勤、またはそのまま転職という2択を迫られたのですけれども、母親が認知症になりまして、妻をおいて単身赴任では行けないという状況にありました。

そこで、自分の収入も減りますけれども、自分の決断としまして退職をいたしました。

再就職活動なのですけれども、会社から紹介がありました産業雇用安定センターという法人と、民間の就職あっせん会社と、選択肢が複数ありましたところがよかったと思っております。

また、そちらに離職前に登録できまして、その後の就職活動ですけれども、どのような職種、自分に何ができるかということを考えながら進めていこうと。相談役があったことが自分の中では大変よかったのかと思っております。

非常に悩むことがいろいろあったのですが、自分に大切なもの、または優先順位をつけまして、その都度できる限りのことを絞り込むことが必要だと改めて感じました。

今の会社ですけれども、以前やっていた職種が活かせる職場でありますので、今後も続けていきたいと考えております。

以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

以上、転職、中途採用についてお話をいただきました。

総理から何か御質問があれば。

○安倍内閣総理大臣 真野さんはパナソニックに勤めておられて、パナソニックを辞めて新たな人生を歩むときに、パナソニックの関連会社に行くというよりも、全く別の会社に行こうと思ったということですか。

○真野氏 はい。パナソニックには未練はなくて、デザインをしたいと。デザインをするためにどういう方法があるかというところからスタートしました。

ですから、アイリスに勤められなければ、最悪の場合は自分でデザイン事務所を開くということで、デザインをするための人生なのだから、やはりこれはいい機会なので、パナソニックの子会社ではないほうが、新たな自分のデザインの幅が広がる。楽しむということを前提に考えて、デザインができるところをとこのを基準に選びました。

○安倍内閣総理大臣 その際、パナソニックのバックアップがあったということですか。

○真野氏 はい。希望退職に限らずですけれども、その後の人生設計であるとか、社会保障であるとか、きっちり自分で辞める前にシミュレーションさせていただけなのです。

トレーニングについても準備期間があるので、それは非常にありがたかったかと思っています。

○安倍内閣総理大臣 雨堤さんは再就職の際に年齢がネックになったということですが、やはり採用試験を受けていて、あるいは面接をして、その経験とか知識、実際の体力よりも、紙に書いた年齢という形で判断をされていたということですが、やはり60というのは大きな壁だったというふうに。

○雨堤氏 そうですね。自分では若いつもりしておりますし、何でもできるつもりでおるのですけれども、やはり面接の履歴書の中で判断されてしまうと、やはり年は、私は57でしたけれども、57というところを見られてもうそれだけでだめだなという判断をされて、書類だけで落とされたところもありますし、人間はそのようにひとくくりにできないと思いますし、実際に使ってみてもらって、その会社になじむかどうか人も人によって違いますので、一遍見ていただ

いたらいいのですけれども、なかなかそういうところまで企業には見てもらえないという気はします。

○安倍内閣総理大臣　そういう意味では、アイリスは紙に書いた年齢ではなくて、実際に面接した結果をとということですか。

○雨堤氏　そういうことなのですかね。

アイリスがたまたま製品開発、家電開発を進めようという中で、私が過去にやってきたことがちょうど合ったのだと思います。

ですから、今やっているアイリスの仕事というのは、私のシャープの延長線上でもありますし、何らこれは支障がなかったのですけれども、そういうところでは。

○安倍内閣総理大臣　なるほど。

私も62歳になったばかりですから、そろそろ厳しいのだなと思いますけれども、実際、私も若いつもりですから、そういう意味では企業等で実際の年齢ではなくて、実際にどれぐらいの体力があるか、健康かということなのかとも思いました。

あと、佐藤さんは営業職からいわばものづくりに変わって、昔でいえば手に職をつけるというか、技術を身につけられたのですが、やはり達成感という意味においては、営業職時代とは大分違いますか。

○佐藤氏　はい。そうですね。やはり自分の手で全て、書道と一緒に、本当に自分の手先のちょっとした動きで全て毛色の違う物ができるというか、溶接一つにしても、うまく言えないのですが、物をただ売るとか、お客さんに接客するとか、そういう状況とはまた違った、自分の手の力で全てをつくり上げる。

私の場合は溶接なのですけれども、溶接の後にディスクグラインダーというもので擦り上げて、塗装前のきれいな製品の形まで仕上げる仕事までやっております。

○安倍内閣総理大臣　前の営業職時代と比べて、収入のほうはどうですか。

○佐藤氏　収入のほうは、そのころよりは、最初入ったときは幾らかは低い状態で入れたのですが、やはり自分の技術とか頑張りを認めていただけまして、今は以前よりも収入はよい方向でいただけています。

○安倍内閣総理大臣　島田さんは御家族の事情がいろいろおありだったと伺っていますけれども、今の職場では仕事の勤務時間等も含めて、家庭の事情とうまく折り合いがついているという感じなのですか。

○島田氏　はい。おかげさまで本当に、今は家族と一緒に生活ができるという一番の喜びがありまして、収入は減ってしまったのですが、やはり家族と一緒にいられるというのが一番、本当に自分の中では大切にしているものであって、一番楽しいというか、本当に今後、時間を一緒に過ごしていきたいと考えてお

ります。

○安倍内閣総理大臣 あと、再就職の際には選択肢が幾つか提供されたということなのですか。

○島田氏 やはり、先ほど言いました母親の介護というものと、今までやっていました製造業という形の2択でいろいろ悩んだのですが、家から通えるということに一番の優先順位をつけまして、その中で選択できる会社で、今回のGMタイセイという会社から内定をいただきまして、今も楽しくやっております。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、続いて、学び直しをして再就職をされた3名の方においでをいただいております。

最初に濱田様からお願いします。

○濱田氏 濱田直子でございます。

早稲田大学を卒業後、大手損害保険会社に入社いたしまして、結婚に伴う転居により離職いたしました。日本女子大学リカレント教育課程での学び直しを経て、東京ガス都市開発株式会社へ正社員として入社いたしました。

私は新卒で入社した会社を今、申し上げたように、結婚に伴う転居のため3年余りで退職いたしました。子供が小学生までの間は、添削作業を在宅で行っておりましたが、正社員として仕事に就き、自己成長を図りたいと思うようになりました。

主人が単身赴任、娘は中学に入学いたしまして、家庭環境が就業を許す状態になりました2014年の夏、正社員での再就職を目的に、日本女子大学リカレント教育課程の受講を決心いたしました。

日本女子大学リカレント教育課程は、大学卒業後に出産等で離職した女性に対して、1年間のキャリア教育を通して、再就職を支援するプログラムでございます。2016年から文部科学省の職業実践力育成プログラムの女性活躍分野に認定されております。

1年は長いと言う方もいましたが、私には1年間じっくり学び直すということとはとても重要なことに思えました。自らの人材としての価値と、ありがたい姿とのギャップが大きかったので、自信を持って社会に出るためには、じっくりと力を蓄える必要があると考えたからです。

リカレント教育課程の授業は、実践的で興味深いものばかりで大変勉強になりました。ビジネス関連科目や、自分を見つめ直し、再就職の準備をするキャリアマネジメント、英語の授業でもビジネスの考え方やレポートの作成能力を鍛えることができました。

また、同じ目的を持ち、意欲にあふれる受講生と過ごす時間も大変貴重なものでございました。仕事に対する家族の理解など、それぞれが抱える悩みが違

っておりまして、その悩みを共有することで、就業に対する自らの現状について把握できました。就職活動のフォローなど、大学事務局の方々が親身にサポートして下さったことも大きな支えとなりました。

1年間の受講期間を終え、私は新たな一步を踏み出すことができました。リカレント教育課程を通じて、現在勤務している東京ガス都市開発株式会社との縁をいただきました。業務経験のある損害保険の事務を担当することになりましたが、保険を入口として、業務の幅を広げることも可能な総合職としての採用です。

私のように子育ての時期や家庭環境というライフスタイルに合わせた再就職をするという希望を持ちながらも、自信を持ってない人が多くいます。実現が可能だと自信をつけるためにも準備が必要だと思います。

そして、女性の再雇用に対して理解のある企業が増えることを祈っております。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、高木さん、お願いいたします。

○高木氏 高木みどりと申します。現在、IT会社に勤務をさせていただいております。

まず、簡単にプロフィールなのですが、私は日本女子大学を卒業後、大手生命保険会社に営業職として就職いたしまして、その後、1年ちょっとで退職をいたしました。

その後、一橋大学大学院商学研究科経営学修士コース、いわゆるMBAというところで取得をさせていただいております。現在の会社に至るところでございます。

私からは、今回3点お話しさせていただければと思うのですが、まず、1点目は、なぜ大学院に行って学び直しをしたのか。2点目は、学んだことが今の業務に生かしているか。3点目は、前職と現職との働き方の違いについてお話しさせていただきます。

まず、なぜ大学院に行って学び直しをしたかなのですが、学部を卒業後、先ほど申し上げたみたいに保険会社に就職をして、営業を行ってまいりました。1年がたつと、だんだん仕事にも慣れてまいりまして、そうすると、もともとやりたがっていたマーケティング職への希望が非常に強くなってまいりました。

ただ、マーケティングを体系的に学んだこともなければ、経験ももちろんありませんので、ただの憧れでしかなく、転職という意味ではすごく絶望的でした。

いろいろ転職活動を行ったものの、やはり希望の職につくことは難しかった

ので、営業を続けながら夜間の学校に通うか、いろいろ悩んではいたものの、自分の退路を断つために思い切って退職をいたしまして、退職から2カ月後の試験に向けて猛勉強しまして、2カ月後に晴れて合格をしたというところでございます。

キャリアチェンジをするためにはどうしたらいいのかと、自分一人で非常に悩んでいた時期もあったのですけれども、周りのキャリアチェンジをした方にいろいろお話を伺いながら、さまざまな選択肢の中で、自分にはMBAが一番合っていると思って取得をした次第です。

学んだことが業務に生かしているかなのですけれども、MBAではマーケティングのほか、経営学というのを学ばせていただきました。知識と経験というのは異なるものだと思っているので、まだまだ若輩者の私に経営ができるかという、なかなかそういうのは難しいかと思っておりますが、ただ、経営の視点を手に入れたことで、例えば大きな壁にぶつかったときに、この問題を経営者だったらどう考えるかとか、全社的に考えたらどう動くべきかというような体系的な考え方、問題の本質を冷静に考える力が身についたかと思っております。

現在の会社では、入社からずっと横串的な存在のマーケティングをやっております。経営陣との距離も非常に近いです。なので、経営の経験を積むには非常によい環境だと思っております。

3点目、前職と現職の働き方の違いについてなのですが、大学院を卒業してベンチャー企業のITに就職しようと思いましたが、多様な働き方があると考えたためです。実際、就職活動をしていたときに、私の営業の職歴のことや、1年で辞めてしまったことをすごくマイナスに捉えて受け入れてくれない企業も正直あったのです。ただ、現職の会社では、私がむしろ退職をしてまで学び直しをしたということに非常に共感をしていただいて、評価をしてもらいました。

面接でも経営に興味がありますというお話をさせていただいたのですけれども、そこにも理解を示してもらえたので、現在の会社に入ろうと決意をいたしました。

現在の会社なのですが、働き方について非常に柔軟にやっていただいております。1年前に子供を産んで、つい5月に復職をしたばかりなのですが、妊娠中もやる気をきちんと酌んでいただきまして、妊娠中ながらも役職をつけていただいたりとか、復職後も私は突然休むことがありますので、必ず私の仕事にパートナーをつけてくださいということを会社をお願いしたら、パートナーをつけていただいて、非常に柔軟なやり方で会社で過ごさせていただいております。

1年足らずで復帰しまして、今は時短で働いているのですが、前と変

わらず非常にやりがいのある仕事を任せていただいております。

以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、築取さん、お願いいたします。

○築取氏 築取萌と申します。今は病院経営のコンサルティング会社に勤務をしております。

私はもともとは国立病院の集中治療室で看護師として働いておりました。その病院の勤務時代に、医療現場は非常に非効率だなといったところに問題意識がありまして、その部分で勉強したいということで、高木さんと同じく一橋大学のMBAコースに入学をしております。

MBAで学んだことを生かしながら、あとは、さらに俯瞰した視点で医療を改めて見直したいということで、現在の病院経営のコンサルティング会社に転職をいたしまして、現在働いているという状況になります。

現在は全国の急性期病院に伺って、診療内容の見直しであるとか、病床再編のところでお手伝いをさせていただいているということで、コンサルティングを展開しているというのが現在の状況でございます。

キャリアを変えたといったところは、やはりMBAに入って、MBAを取ったといったところが非常に私にとっては大きなきっかけではあったのですが、ただ、その以前の職業で、看護師の経験というのも今の仕事に非常につながっているところがあります。やはり病院の経営幹部であるとか、あとは現場のスタッフの方々と関係を構築していくといったところでは、実務の経験というのが非常に重要で、その上にMBAで培った経営の知識というのを使って、問題解決に取り組んでいるということがあります。

ただ、振り返って考えてみると、専門職の世界というのは非常に狭いというか、閉鎖された世界になりがちで、なかなか外に目が向かないということと、情報が入ってこないということがあります。

私自身も看護師として働いていたときには、世の中のことに全く興味がなかったというか、関心がなかった。今、自分が働いている、働き方ということ自体も全然想像もできなかったということがあります。

日本に潜在的な看護師が70万人いると言われておりますが、彼女たち、彼らが病院とかクリニックで働くことだけが、彼らの働く先ではないと思います。もともとの専門的な知識を生かして、新しいフィールドで働いてもらうといったところで、能力が活用できるのではないかと考えております。

ただ、新しい分野で働くためには、まずはそういう新しい職業、新しい働き方があるということを知ってもらうというのが、第一歩なのではないかということで、当然のことながら転職時の支援で、新しい働き方といったところを見

ていくというのも一つではありますけれども、もっとさかのぼって、大学であるとか、専門学校のところでもそういう新たな働き方であるとか、柔軟な働き方というのを学べるような機会があると、学生のうちにそういう働き方があるのだといったところを自分の中で考えることができますし、その先の具体的なアクションに将来的にはつながっていくのではないかと考えております。

以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、今、学び直しをして再就職をされている皆さんから。

総理のほうから。

○安倍内閣総理大臣 第一次政権のときに、再チャレンジというのが大きな柱に掲げてあるのですが、日本は非常に単線で、大体18歳のときから22歳のときにどんどん運命が決まって、もう一回やり直そうという社会ではなかったのですが、その意味で大変、3人の皆さんのお話を伺っていて、第一次政権のときから約10年、実際に随分世の中変わったと思いましたが、最初の濱田さんは、リカレント教育課程の存在は早くから御存じだったのですか。

○濱田氏 正社員で再就職をするに当たって、何か学ばなくてはいけないと自分で思っていたところに、インターネットを見たりとか、いろいろなものを探している中でめぐり会いまして、ああ、これはと決めて決心いたしました。

○安倍内閣総理大臣 そうすると、その1年間がなければ今の職場、東京ガス都市開発に入ることはできなかったということなのでしょう。

○濱田氏 そうですね。2つの面からそう思うのですけれども、学び直しをできたということもそうなのですけれども、そういう理解のある企業と出会えたということも、先ほどの話ではないのですけれども、私が履歴書をそのままブランクがとともあるという状態で出したときに、果たして会ってくださるかというところになりますと、やはりそのリカレントさんの活動があつての結果だと感じております。

○安倍内閣総理大臣 あと、高木さんは1年間で生保を辞められて、そこで一橋大学のMBAを取得されたということなのですが、約10年前に再チャレンジ政策を進めたときは、アメリカと違って日本では理科系ではない場合、文科系のMBAも含めてほとんど評価されなかったのです。新卒で入らないととにかくだめだと。

そうすると、人生の途中でもっと勉強すればよかったと、ある程度して大人になってから考える場合があるのです。

そうしてもなかなかやり直しがきかないというのは、やはりおかしいのではないかって思って経済界などにも働きかけをしてきたのですが、同僚の皆さんも結構あれですかね、やはりMBAを持っているということをしつかりと評価されて、

今の再就職をされたということなののでしょうか。

あと、やはり同僚と一緒に勉強しておられた皆さんも、女性の皆さんも結構就職がうまくいかれた方も多いのですか。

○高木氏 そうですね。就職はなかなか、リーマンショックが起こった後だったのでなかなか厳しい時期ではあったのですけれども、同級生は皆、それぞれすばらしい会社に就職しております。

私自身もすごくいい会社にめぐり会えたと思っていまして、まず、大学院でMBAをとったことによって、物すごく自分に自信がついたのです。その自信が就職活動のときも、自分のこういった経歴を受け入れてくれない会社には行かなくていいとまで思っていたので、そうした受け入れてくれるような会社、すごく歓迎してくれるような会社と出会えたというのは、すごくありがたかったと思っています。

○安倍内閣総理大臣 あと、築取さんは看護師で国立病院に行っておられて、そこでキャリアをどんどん積んでいって、看護部長というコースに移るのですが、そこよりもむしろ新しい世界を切り開いていこうということを考えられて、MBAをとろうと考えたのですか。どういう動機だったのでしょうか。

○築取氏 もともと、できれば病院に勤務をしながらMBAを取得したかったというのが本当だったのですけれども、何年か前になりますので、まだそういうMBAの理解というのが、特に医療に関してはほとんどなかったといったところで、そのまま就業しながら、あとは休職しながらということさえも難しい状況でしたので、そこは仕事としては辞めざるを得なかったというところがあります。

○安倍内閣総理大臣 まさに医療の分野にこそ、病院経営等は経営感覚が医者様も含めて大変大切なのかと私もずっと思っていたのですが、やはり築取さんのように医療の現場を知っていて、かつ、しっかりと経営を学んだという方は大変貴重だと思いますので、ぜひ、これからさらに模範を示していただきたいと思います。

○築取氏 ありがとうございます。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

そうしたら、次に副業・兼業の関係で3名の方においでいただいております。

まず、最初に墨田さんからお願いいたします。

○墨田氏 ロート製薬の墨田です。私のほうは副業・兼業しているというよりも、副業を提案した話をさせていただきます。

ロート製薬に入社以来18年間、マーケティング部門で商品企画をやっておりながら、兼業的に3年前、社内の人事制度改革プロジェクトのリーダーを務めました。

今回、そういったプロジェクトをやった背景なのですけれども、やはりそう

いった事業の変化とか、世の中のいろいろな変化の中で、我々社員がどういふふうに変化して、生き生きと働くのかみたいなところを後押しできるシステムを、社員みずからで考えたいというところから考えました。

少しおこがましいかも知れないですけれども、我々のそういった新しい提案が、日本の働き方を変えるような、本当にそういう働き方になればいいねということ、すごく思ってスタートしたプロジェクトでした。

プロジェクトメンバーは大体20~40代の若手中心に通常業務を行いながら、兼業的に週1~2日をプロジェクトに当てて、それを半年間行ったということを進めてきました。

プロジェクトで一番大変だったことは、副業制度をやろうとか、制度の話をしているときは非常に皆活発な意見が出るのです。副業を認めようだったりとか、期限つきにいろいろな部署で働くのはいいことだみたいなことを、やろうやろうとなるのですけれども、みずから自分たちで実践しようとしたときに、すごく意見がみんなネガティブになって、では、どのような副業をするのだとか、時間管理をどうするのだ、成果の評価ができるのかみたいなところを、非常にネガティブになったのですけれども、そういったときに改めて、なぜ我々がこういったことをやっているのかといったときに、制度をつくるのではなくて、自分たちの成長のためにやっているのだから、成長することを中心に考える必要があるのではないかということになって、プロジェクトが前に進み出しました。

では、社内で成長しているのは誰かを考えたときに、そうしたときに我々のプロジェクトで生まれたコンセプトが、倍量倍速で成長するというコンセプトでした。倍量倍速で働くというのではなくて、成長というところが非常にポイントで、そういったところを社内で見渡したときに、社内にそういう人がいるというよりは、出向してほかの会社で働いている方とか、海外に行ってみずからビジネスを切り開いているメンバーというのが、社内からも成長しているのではないかという声が聞かれました。

具体的には、東北の復興支援室の初期メンバーが、そこに行って復興支援活動をしなが、地元の漁師さんと漁業のサポートをするということをやったりとか、アフリカにビジネスを立ち上げるために、女性なのですけれども単身で行って、1人でビジネスを立ち上げたメンバーというのが、実は社員にいました。

そういった人の話を聞くと、やはり新しいことの刺激とか、話が全然違うのです。そういった人が戻って来ると、周りもすごく刺激になりますし、成長のためには、こういった刺激を得るということ、どういうふうにつくるかということがすごく必要ではないかと考えました。

そういう意味で、我々は成長においては新しいことにチャレンジする、また、そういったところに一步踏み出すためにということがすごく大切で、そういうためには、中ばかり見ていると全然だめで、どれだけ外を見て、外に飛び込むということをするかということが成長につながる。

そういうことを後押しできないかということを考えて、今回副業ということをやったり、社内のダブルジョブということをご提案させていただきました。

副業であったり、ダブルジョブというのが働き方の一つだと思っているので、本来は社員、極端に言えば社員一人一人の働き方というのがあったらいいのだと我々は思っていますし、これからは副業に限らず、本当に新しい異端児的な働き方を社員自ら提案していきたいと考えております。

以上になります。ありがとうございました。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、二瓶さん、お願いいたします。

○二瓶氏 墨田と同じくロート製菓の二瓶と申します。

私は入社して3年間、東京で営業をしまして、その後、2011年の3月11日に震災がありましたけれども、その直後に発足したロート製菓の震災復興支援室という組織がありました。そこに志願して、そちらのほうで、震災で親御さんを亡くした子供たちの高校卒業後の進学基金で、みちのく未来基金という基金があるのですけれども、ロートとカゴメさんとカルビーさんの3社で立ち上げた基金になります。その設立と運営を1年半行いまして、その後、仙台支店の営業所に戻りまして、それが現職という形になります。

副業に関しては、今年の4月からスタートをしております。Fukunomo（フクノモ）といいまして、私は福島県出身なのですけれども、福島日本酒と、蔵元さんが選んだおつまみと、これはそれに添えている冊子なのですが、これは末廣酒造さんの号です。それを企画して販売するようなNPOのfukunomoで今、副業をしております。

もともと私は、地酒というのは土地の人と水と米とでつくっている、その土地の文化の結晶という考え方から、福島のことを応援したいと思って1人で活動していたのですけれども、今年、墨田たちがつくった副業とか、そういったプロジェクトが会社で解禁されまして、これはチャンスと思いまして手を挙げて、副業をスタートしています。

もともとロートの復興支援室にいましたけれども、会社の異動とか組織変更で、どうしてもその場からは離れなければいけなかったもので、とはいえ、やはりその思いはずっとありましたので、会社の組織にかかわらず、福島とか東北を照らすような働き方というか活動をしていけないかということで始めたのが、今のfukunomo活動になります。

実際やってみてというところなのですからけれども、私はロートで営業していますが、そちらのほうの副業先に行ったら、もう10人足らずの組織なので、全部マネジメントとか経営というか、マーケティングとか顧客管理とか、そういったことが全部自分たちの手で行われるというのは非常に、一つ一つがすごく勉強になりますし、発見と勉強の連続だと思っております。

出先で会うような蔵元さんなども、お一人お一人が経営者ですので、そういった方とお話をさせていただく中で、経営の視点とか、特にやはり地元の蔵元さんはすごく地域に対する思いが強いので、そういった方と接点を持つごとに、よりその気持ちが強くなっているというのは、自分が今、活動しているところなんです。

とはいえ、会社の仕事と、今やっている仕事と、どちらもやる中で、時間管理の部分では非常に、やりながらやり方を見つけていくという形かと思っております。今の仕事を、できる部分はできる限り効率化して時間を短縮しながら、ただ、とはいえ考える時間とか、絶対に時間をかけなければいけない時間というのはあるので、そのメリハリをうまくつけながら、悪戦苦闘しながらやっておりますが、そういった中で、結構自分のことについて省みたりとか、組織のことを客観的に見るような視点が生まれるというか、そういったくせづけも、ちょっとずつできてきているかと思うので、それが結果的に成長につながっていればいいなと思っております。

自分がやりたいことができているというのが何よりも充足感になりますので、そういった意味では本業の方へのモチベーションというのも結果的に上がっていると感じています。

以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

続いて中村さん、お願いいたします。

○中村氏 こんばんは。中村龍太と申します。

今、サイボウズという会社で働いています。ソフトウェアの開発会社です。サイボウズ以外にあと3社兼業しております。サイボウズとしては一番コミットしていない男として会社では評価されています。

私が兼業を始めたのは2013年で、今から3年前です。その当時はマイクロソフトという会社にいまして、夜から朝まで働くこともあったのですけれども、そこに16年いました。

当時、私がやりたかった仕事というか、やりたかったことが3つぐらいありまして、1つは、私は今、千葉県に住んでいまして、自宅に圃場、農場があります。この農場を親父から借りて、何かやれないかというのが1つです。

2つ目が、実は広島生まれでして、今、嫁の実家が圃場なのですけれども、

広島とか中国地方に行くと、過疎地域とか限界集落があって、この地域はどうにかならないのかというのが2番目です。

3番目は、キャリア教育を私の母校の中高生にやっていて、その中高生に私がやってきたICTの關係の、いろいろなスキルを教えるともっと成長するのではないか、みたいな話に興味がありまして、それを何年か後に、当時は5年後に何か携わって、マイクロソフトをやめて何かやろうかと思っていました。

ただ、当時、何で5年後かというのと、2人ほど大学生の子供がいて、お金がかかるのですぐ辞めるわけにもいかずに悶々としていたところ、サイボウズの青野社長に縁があって会いました。

来てくれという話になったのですけれども、収入がマイクロソフトの半分になってしまうのです。当時マイクロソフトでも別に悪い業績ではなかったわけで、嫁に半分になるという説明責任がとれなくて、しょうがないと思っていたんですが、青野から副業ができるという話があって、もしかしたらもう一社ぐらい、いいですかみたいな話があって、副業にチャレンジしようと思ったのが3年前です。

どういう副業をやろうかと考えていて、マイクロソフトと同じように忙しいという副業をすともったいないと思っていました。よく考えたところ、1つの成果が2つの会社につながるような副業先が見つかるといいなと思っていました。結果としてもう一社、IT会社に入って、建材屋のような立場であるサイボウズで開発しているソフトウェアをカスタマイズしてお客様に届ける、建築屋さんみたいな会社に入れればいいなと思って探したのがダクソフトという会社になります。そういう意味では、サイボウズが、一部上場の会社なのに副業ができるというのはすごいと思っています。

今ではダクソフトという会社と、農業をやりたかったのでNKアグリという会社。今、ここにあるリコピンエンジンというのがあるのですが、機能性表示ができる野菜に新規就農者としてチャレンジしています。もう一つが、スノーピークビジネスソリューションズで、新潟にあるテントなどのキャンプ用品の販売の会社にいます。

兼業の成果としては、私の圃場が印西市という千葉県でも非常に東京に近いところがあるので、NKアグリとしては広報用の圃場としてリコピン人参の栽培をしながら、NKアグリのエンジンが累積温度で何度になればリコピンが最大化するというKPIを持っていて、これを各圃場、実は南は九州から北は青森まで、これら圃場の温度を測って、いつできるかという収穫時期を予測したい理想があったので、サイボウズのクラウドサービスを使って、各地域に置いたセンサーからの温度を、IoTで集約して、全国の農家さんと共有しチームワークを組めばおもしろいではないかという提案をして、実際に入れました。

去年、500トンのニンジンがセンサーとITで事業化できたということで、サイボウズからも、NKアグリからも喜ばれ、そして自分の家の親からも、ああ、農業やってくれるんだと安心してもらったというのが、今の学びです。

最後に兼業で困ったことがあるのですが、実は4つも兼業していると、やはり予定表、スケジュールの管理が複雑で、それぞれ予定をアプリに入れていくのですけれども、それを一度に見られないというのがあって、ダブルブッキングとかしないようにしていることが一番大変なところです。

ちょっと長くなりましたけれども、以上でございます。ありがとうございます。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、今の3名の方に対して、総理からございますか。

○安倍内閣総理大臣 今まで日本では兼業というのがあまり、兼業農家という話はあったのですが、本格的な兼業ということは日本ではほとんどなかったのだらうと思います。

ロートのお二人は、まさにロート製薬という大きな企業で兼業が許されるようになったと言ったのですが、墨田さんは、ロートでは社員の何パーセントぐらいの方が兼業しているのでしょうか。

○墨田氏 応募は大体5%弱だと。募集があったのが今年ですので、社員が1,500名のうち65人ぐらいの募集があったと聞いております。

○安倍内閣総理大臣 兼業という仕組みがスタートして、ロートにとっても明らかにメリットもあったという印象を持っておりますか。

○墨田氏 具体的なメリットに関して、スタートしてまだ半年というところではあるのですけれども、ただ、やはり外から見ていると、副業しているメンバーには結構人が集まってくるというか、そういうのがあると思います。

人が集まると、そこで新しいコミュニケーションができて刺激になるみたいなところがあるので、まだ具体的な成果というところまでは見えてはいないのですけれども、我々が外から見ていたときには、今までとはやはり違ったような、何かいい方向に向いているような気はしております。

○安倍内閣総理大臣 なるほど。

あと、二瓶さんは新たに会社を起こされて、一緒に起こされたのでしょうか。労働時間的にはどのようになっているのですか。

○二瓶氏 基本的には会社の終業後の時間と、あとは土日を使ってやっているのが、今の私の副業先での活動という形になります。

結果的に労働時間という形で単純に考えたら、増えてはいます。ただ、私も労働時間の考え方に対しても、自分のことを決してワーカーホリックとは思っていないくて、その時間の中身というか、自分がどれだけその時間に充実感を

覚えているだとか、やりたいと思ってやれているかというところが非常に重要だと思っていますので、結果的に仕事と自分のやりたいことというのが、すごく両立しているというか、そういった意味ではすごくやりがいを感じてやっているのが、今の私の副業のスタイルです。

○安倍内閣総理大臣 最初は墨田さんが、みんなが企画しているときはいいのではないかと行って、しかし、いざ始めるといろいろな、今、言った労働時間の管理の問題とか評価の仕方とか、今日、この会議が始まる前に我々は少し会議をやったのですが、同じことが出てきまして、これを進めていくと、我々がやっている働き方改革はいろいろレッテルをつけられまして、残業代ゼロ法案とか言われるのですが、兼業を認めるとこれは働かせ放題とか言われる危険性があると思って、そういうのに対してどう対応していくかということもよく考えていかなければいけないと思っていますのです。

ただ、それは皆さん望んでやっておられるわけですから、その中で働き過ぎにならないようにどう管理していくかということも、またこれから別の機会にお話を伺いたいと思います。

また、中村さんは今までの兼業農家のイメージを一新されて、兼業農家という市役所に勤めて、代々の農家を、兼業農家の場合は大体お米なのですが、そういう畑でつくるものは基本的に専業でないと難しいのですが、いわばセンサーとITを活用して農業の生産性を上げるというのは、我々がまさに目指しているところなのです。

○中村氏 そうなのですね。

○安倍内閣総理大臣 例えば豪州などは随分成功しています。オランダもそうなのです。やはり使っていけば、これは未来があるという感じはしておられますか。

○中村氏 もちろんそうですね。IoTで一番大切なのは、いつ収穫ができるかわかり価格の安定化が図れることなんです。私が農業と兼業するに当たって、他の兼業先のお休みを収穫のためにいつとらなければいけないかを前もってわかることも重要で、IoTによって労働力が確保できるという意味でも、未来には必要なテクノロジーです。

○安倍内閣総理大臣 圃場の大きさはどれぐらいなのですか。

○中村氏 1ヘクタールです。普通の農家の平均的な。

○安倍内閣総理大臣 これをもっと大きく。

○中村氏 いや、どうですかね。

○安倍内閣総理大臣 ただ、千葉でやっていくというのは、いろいろ難しいでしょう。

○中村氏 そうですね。むしろ広報的な立場で利用してもらおうという圃場もあ

っていいかと思っていて、みんなに見学しに来てもらう。あまり大きくなっていいと思っています。NKアグリから見れば、私の圃場の場所の有利さというのを見ていただいていると思っています。

○安倍内閣総理大臣 過疎地を活性化していきたいということは。

○中村氏 そうですね。過疎地ですね。そういう意味では今、益田市というところに、住民にクラウドサービスを使って頂き、サルが出たとかイノシシが出たというのをみんなで共有するとか、空き屋も現場でしかわからないので、空き屋で本当に使えるもの、オーナーがいてまだ使えないというものを市役所も含め共有してもらっています。それはサイボウズのクラウドサービスを使ってみんなで。普通は会社で使うものなのですからけれども、住民で使えるということを今、実験でやっていて、私もそこに入って一緒に学んでいるという状況です。

○安倍内閣総理大臣 どうもありがとうございました。

○中村氏 ありがとうございます。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

最後になりましたけれども、テレワークについて横澤さんからお願いいたします。

○横澤氏 神奈川県横浜から来ました向洋電機土木株式会社の横澤と申します。よろしく申し上げます。

私は約10年前、違う職種だったのですが、介護が理由で離職をしている人間なのです。私の父ががんになりまして、小腸からのどの先まで全摘出をしまして、もう介護を自分でやらざるを得ないという状況になってしまいました。

当然、会社からサポートとかそういういろいろなものを期待したのですが、なかなか難しかったというのと、もう一つありまして、私は子供も生まれてしまったので、今、小学校1年生の娘がいますので、ダブルケア状態になってしまっているのです。ですので、テレワークというシステムを自分自身が確立して、構成して、生かしていくということをやらなければ仕事が行かないということが、私の第一のテレワーカーとしてのスタート地点だったのです。

現在進行形で、私はまだ父親も存命ですので、ダブルケアが継続しているような状況なのですが、大体週4～5日、日によって違うのですが、私はテレワークを使用しまして仕事を行っているような状況です。

テレワークを使うことによって、例えば時短勤務とかフレックス、あとは有給休暇の取得とかを、何でも有給を使わなければいけないという流れから、大分そういうことをしなければ、そのようなものを使ってはいけないとかというのは、会社としてはできなくなる人はいなくなりましたし、みんなが自由に使

えるような形になって、現在、うちの会社では、すごい小さな零細企業ですけども、テレワークは社員全員使うような状況でやっておりますし、実を言いますと、私は9月から今週まで入院しておりました。ただ、入院している先でも、例えば病院で使えるエリアに持って行けばパソコン等を使ったりとかで、テレワークで仕事ができるという、私の場合は内臓系の病気だったので、目が見えないとか、手が動かないとか、そういうことではないのですけれども、そういった使い方もできることによって、時短勤務とかそういうのではなくて、有給を潰さなかった。そういった形で、私自身も安心して仕事ができますし、会社としても連絡がとれるから安心して仕事ができるという形で今、活用しているような状況です。

私はやはりテレワークを使用している人間なので、制度をつくっている人間ですけども、同時に使用者です。ですので、自分が何の問題があるのかというのも十分理解していますし、どのようなときに助かったというのもわかった状態でやっていますので、今の会社の社長の私に対するミッションなのですけれども、介護と育児で一番困っているあなたが一番働きやすい会社になれば、それはうちの会社がよくなる形だから、君が一生懸命働きやすい会社になるように、つらいだろうけれども頑張って、テレワークを駆使して働いてくれと言われていています。

ですので、私はこれからも精いっぱいテレワークを使って業務を推進して、うちだけのテレワークではなく、相手もそうなるとどんどん、ほかの会社も使えるようになると推進していくと思いますので、やっていけるようにしたいと思います。

私のほうからは以上です。ありがとうございました。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

最後になりましたが、広沢さん、お願いいたします。

○広沢氏 損保ジャパン日本興亜の広沢と申します。よろしくお願いいたします。

私が所属する部署は、お客様からの声とか、さまざまな現場からのアイデアや要望を改善の気づきとしまして、お客様へのサービスの品質を向上させる仕事をしております。

小学校4年生の男の子と、1年生の女の子の子育て中です。育児休暇後に復職をしたのですけれども、その際はフルタイムで復帰しました。

テレワークは通勤時間なく仕事ができますし、自宅で仕事をするということによって非常に業務に集中できるということもありまして、仕事と育児の両立に非常に活用させていただいております。子供が急に熱を出したりとか、インフルエンザで学級閉鎖になったりとか、あとは学校の行事で授業参観が平日の昼間に

あったりとか、割と短時間なのですからけれども職場を離れなければいけないということがあるのですが、そういったときもテレワークですと通勤時間がありませんので、非常に時間を有効に活用できております。

また、担当している業務が、お客様の声を分析する仕事ですので、自宅での作業が非常に効率的で、業務に集中できるので生産性も向上しております。

テレワークをしている中で、先ほど申し上げたさまざまなメリットがあるのですけれども、そのほかにもさらによかったことが2つございます。

1つ目は、テレワークをすることによって時間が生まれますので、地域のPTA活動に参加をして、少し社会貢献ができております。今年は月に1回の地域の補導安全パトロールを行っております。

もう一つよかったと思うことは、やはり子供が帰ってきたときに、お帰りなさいと子供を迎えてあげることができるのが非常によかったと思っております。

当社のパソコンはシンクライアント端末と申しまして、ハードディスク、記憶装置がない、セキュリティの高いパソコンで、持ち歩くのも片手で持てるぐらいの重さですので、自宅へ持ち帰って作業するというのも可能になっております。

これから子供が大きくなって、手が離れていくとは思いますが、その中でもテレワークを活用しまして、仕事と生活を調和して、キャリアを重ねて生き生きと働いていきたいと思っております。

私の方からは以上です。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

それでは、最後に総理から。

○安倍内閣総理大臣 横澤さんですね。収入の方はテレワークと、それまで会社に行っていたときと全く変わらないのですか。

○横澤氏 全く変わらないです。

○安倍内閣総理大臣 仕事はどうですか。生産性とか、仕事ぐあいは。

○横澤氏 むしろ上がっていると思います。

○安倍内閣総理大臣 なるほど。やはり、上がっているという理由は、ある程度自由な働き方の中で集中力が高まるということなのですかね。

○横澤氏 通勤の、例えば肉体的とか精神的な疲労というのが一気になくなりますので、その分だけ自分の能力が十分に、例えば眠い中、こうやって電車で通勤する時間とかが、極論で言いますとゼロになりますので、その分、例えば体を休めたりとか、考える時間とか、自分の体調を整える時間に与えたりとかできますので、それはもう十分に効果は高いと思います。

○安倍内閣総理大臣 そうすると、広沢さんは時間は大体フレックスにやることはできていますね。1日の中で何時から何時かということではなくて。

○広沢氏 はい。テレワークも、やはり働き過ぎの防止ということでさまざまなルールが社内で決まっております。

例えば、夜10時以降は絶対にやらないとか、仕事の終業と始業についても、パソコンで常に管理をされているので、そういった面でも働き過ぎは防止をしております。

ただ、総理がおっしゃったように、例えばきょうは9時から5時ではなくて、8時から4時といった形でずらして働くことも可能ですし。

○安倍内閣総理大臣 間をあけたりとか。

○広沢氏 はい。間をあけることは参観に行ったりとか、非常に便利な制度になっております。

○安倍内閣総理大臣 もっともっと、このテレワークの活用が広がるべきだとお考えですか。

○広沢氏 はい。子育てだけではなくて、先ほど皆様もいろいろおっしゃっていたかと思うのですが、介護をされている方もたくさんいらっしゃると思いますし、子育てとか介護だけでなく、生産性が非常に上がると思いますので、生産性が上がった分、ほかのことがいろいろできると思いますので、どんどん広がっていけばいいと思っております。

○安倍内閣総理大臣 介護離職ゼロというのを今目指して進めているのですが、そういう意味でも、かつ、今、生産性も上がるという言葉がありましたが、これから企業が積極的にそれを取り入れていただければいいと思います。

○加藤働き方改革担当大臣 ありがとうございます。

大変活発な意見をいただきましたので、少し予定の時間をオーバーしております。

恐縮ですが、塩崎大臣はお聞きをするだけということで、申しわけございません。

それでは、最後に総括的に安倍総理から御発言をいただきたいと思っております。

○安倍内閣総理大臣 今日は貴重な時間を生かしていただいて、皆様からいろいろなお話を伺い、大変参考になりました。

学び直しというのは大きなテーマだったのですが、大分時代が変わって、学び直したことがしっかりと評価をされて、キャリアアップしていくことができるようになった。これをもっと日本で広げていきたいと思っております。

また、新たな人生をスタートする上において、それまでの経験をしっかりと生かすことができるようになりつつある。そして、全くこの営業職からものづくりに変わる。ですから、そういう可能性があるのだということを、もっともっと多くの人に知っていただくことによって、どうも合わないと思ったら変わる社会にしていくことも必要だろうと思っております。

また、人生において家族とともに生きるということの重要性の中において、仕事を選択できるということも大変大切だと思いました。

この兼業というのは、我々もぜひ、この可能性を目指していきたいと思っているのですが、この働き方の、長時間労働にならない管理の仕方が一つの大きなテーマなのかと思いますし、また、兼業と言っても、企業によって自分の会社と、いわばライバルの会社で兼業されたら困るでしょうから、ロート製薬の方がやはり同じ目薬をつくる会社に移られても困るという、そういう一つのパターンをつくる必要があるのかと思っておりますが、また、テレワークで生産性が大変上がっているという力強いお話も伺いましたので、しっかりとこれをもっと普及するように、我々も務めていきたい。

いずれにいたしましても、10年、20年前と大きく変わって、働き方改革を進めていく上において、今の時代に合わせて、多様な働き方が可能な社会をつくりたいと思いますので、また今後ともよろしくお願ひしたいと思ひます。

どうも、きょうはありがとうございました。

○加藤働き方改革担当大臣 どうも皆さん、大変ありがとうございました。

今総理からお話がありましたように、働き方改革実現会議の議論にも、今日いただいた御意見等も反映させていきたいと思ひます。

それでは、以上をもちまして、働き方改革に関する総理と現場の皆さんとの意見交換を終わらせていただきたいと思ひます。

どうもありがとうございました。